CELからのメッセージ

木や森との共生による持続可能な社会に向けて

大阪ガス㈱ エネルギー・文化研究所 所長 多木 秀雄 *Written by Hideo Taki*

はじめに

地球温暖化防止がいわれ、低炭素社会の実現が目指される中、木の存在が再び注目を集めている。木や森が持つ自然の力は、二酸化炭素の固定やバイオマス利用のみならず、生物多様性保全などの観点からも重要視されるべきものである。同時に、古来「木」は人間にとって最も身近な素材の一つとして、住宅をはじめとする建物や家具、道具として利用され、私たちの生活や文化とともにあった。そして、現代においてなお、木や森は人間の心の安定や心身の成長にとって、重要な意味を持つ存在であり続けている。

今回の特集では木や森が私たちの生活や社会、産業などに与えるさまざまな効用にスポットを当てながら、木が持つ力と、それによってもたらされる持続可能な生活・環境文化の本質を多様な切り口から捉え直したいと考える。

私たちにとっての木や森の存在

高温多湿な雨の多い気候に恵まれた日本列島に暮らす私たち日本人は古くから木や森と密接な関係を持って暮らしてきた。日本文化は「木の文化」とまでいわれる。

降った雨は森があることにより、木々の葉や幹、土壌に溜められ、私たちが生きる上で欠かせない水資源として確保され、洪水を防止する。「森林浴」が好まれるように、私たちが森に入ると、樹木が出すさまざまな物質が人間の神経系に作用し、心の安定等多くの良い作用が与えられる。また樹木は、大気中の二酸化炭素を吸収し、幹などの材の形で貯留することから、地球温暖化防止のための温室効果ガス排出削減目標達成手段としても期待が高い。木質バイオマスとしてエネルギー源としても有用である。

木の持つ吸放湿性、断熱性、柔らかい感触等により、木を用いた住宅や家具・道具・玩具等は、私たちの暮らしにゆとり、潤いをもたらしてくれる。本号においても、寺田敏紀氏より京都市における「木の文化を大切にするまち・京都」市民会議の提言についてご紹介いただいている。

直面している問題の所在

世界の森林においては、主に熱帯林の伐採により、アフリカと南米でそれぞれ年平均400万ヘクタール以上の大規模な減少が起きている。2000年から2005年までの5年間に、植林等による増加分を差引いても、年平均で730万ヘクタール（日本の国土面積の約2割）が減少している（『平成21年度森林・林業白書』林野庁編より）。これは、同時に、そこに生息する数多くの生物がこの地球上から姿を消している生物多様性の損失であり、また地球規模での環境問題をさらに深刻化させる事態である。

日本では、スギやヒノキが植林された森が、1950年代の量の3・5倍もありながら、人手不足等も原因して手入れされることなく放置され、荒廃している。恵まれた気候風土等により国土面積の約67%の森林を持つ世界有数の森林国でありつつ、木材貿易において世界第2位の木材輸入国でいる。また、自然との共生圏として人間の手が入った森である里山が、手が入らなくなって崩壊しつつある。生物多様性保全のためには、手を入れてはいけない自然とともに、手を入れなければいけない自然がある。里山は後者であり、以前には人が足を踏み入れ、枯れ枝や落ち葉を拾い、さまざまな植物を採取する等、農地と農村を支えたが今では使われず、荒れた状態となっているものが多い。その面積は500万~700万ヘクタールといわれる。

私たちが意識し、取組みたいこと

◆森に入って木々と触れ合い、知識を深める

机の前にすわって学ぶだけの知識でなく、森林に足を運び、身体全体でよく知ることがまず必要ではなかろうか。そこは、自然の生態系を学ぶ場所として、多様な生物が循環の中で生きていることを感じ取れる有意義な場所である。訪れる時間や季節による変化を含め、他者から教わった知識だけでなく、自身で感じ取った知識がまた大切である。

自分が住む地域の森林を訪れ、それぞれに個性を持った木々と接し、自身がそこで得た知識や感覚を今日に活かすとともに、後世に語り継いでゆきたい。このような地道な取組みが持続可能な地域社会づくりにつながってゆくものと思う。私自身、子供の頃によく遊んだ松林の中を通っていると、一本一本の松の木の姿や鳥のさえずりや風の入り混じった音等に五感が刺激され、何ともいえない落ち着いた気分になる。貴重な癒しの時であり、場所となっている。

英国に「ナショナル・トラスト」という自然保護団体があるが、この団体は歴史的に由緒ある建造物や自然景勝地を大切に管理しながら、一般に公開している。英国滞在時には家族で会員となって多くの建造物、庭園や森林を訪ね、触れ合いを楽しみ、知識と理解を深めるよい機会となった。同団体の会員規模は大きく、人々が自然との共生への関心を高めるのに役割を果たしている。

◆木々との共存を大切にする

日本は、古くは縄文時代に長期にわたり、森林を破壊することなく自然との共存を続けた歴史を持つ。里山は、まさに人間が利用することによって生まれた森林であり、集落の周辺に生活林を作り、そこ

からの資源を利用しながら森林との共存を長く続けた。そこには、日本人の「森林文化」特有の、自然への順応の精神があり、自然をコントロールするという姿勢でなく、地域の特性に応じた共存方法が選択された。

自然の生態系に対しては、人間の適度な保護と適度な介入がそれを守り、長く生き続けさせてゆくことになる。里山に関しては、過去、山でのさまざまな生産活動が生態系に対する一定の、意味のあるかく乱として働いていたのが、働かなくなってしまった。今、その過去に戻ろうとしても簡単ではない。必要なのは、如何にして現代社会に合った形に、里山が持っていたような、人間と自然・森林との有機的な関係を築いてゆくのか、それぞれの営みにつながりを持った循環系のシステムを作り上げてゆくのかである。これは一朝一夕にはできないとしても、さまざまな試行をし続けてゆくことが次世代につながる大切なことである。

◆木の文化を再考する

私たち日本人には、木を素材とした住宅、道具や日々の生活に緑を取り入れる木の文化がある。時代とともに、近代化とともに、私たちの生活には金属、コンクリート、プラスチックなどによる構造物や製品が増え、木が私たちの生活から遠いところへ行ってしまったように感じる。毎日の生活であたりを見回してもその存在が見えにくくなってしまっている。木は私たちにとってかけがえのない、貴重な素材であろう。

木に囲まれた生活とまではゆかないまでも、多少とも木のある生活へ、できるところから取組んでゆきたいものである。私たちが物質的にも、精神生活の支えとしても頼りにした木の文化を再考し、日々の生活やまちづくり等さまざまな面において現代風に活かしてゆくことに気を配ってゆきたい。これが、日本に相応しい、持続可能な生活・社会への一つの重要な鍵を握っていると思う。

CEL からのメッセージ

おわりに

本号では特集テーマとして、木や森の持つさまざまな力に焦点を当て、それらによってもたらされる私たち人間の持続可能な生活・社会のあり方を捉え直すものとした。今回も多くの識者の方々に木や森についてのさまざまな視点や考え方をご紹介いただくとともに、「対談」では、ご自身が八ヶ岳の荒れ果てた人工林を本来の森林の姿に近い雑木林に復元され、そこにお住まいの柳生博氏に登場いただいた。是非ご参考にしていただき、読者の皆様それぞれの生活において活かしていっていただけることを願う。

幸いなことに、若い人々にも、木の魅力を再認識し、木による建造物や道具を見直す気運があるとの話も聞く。私たち日本人が持っている「木を大切にする」精神を、急速に進展する現代社会の生活の中でも、うまく活かし、木々や森林と共生してゆくことが持続可能な将来につながる。同時に、熱帯林の急速な減少は地球に生きる人間全てにとっての大きな問題である。日々の生活を通じて問題への理解を深め、小さなことから、また人を介してでも、熱帯林の保護や再生につながる行動をとってゆくようにしたいものである。

私ども大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所（CEL）では、中長期的な視点から持続可能な生活・社会づくりを目指し、エネルギー・環境、住まい・生活、都市・コミュニティの領域における研究、実践活動と発信・提言を行なっている。人と人のつながりとともに、人と自然とのつながり・共生が持続可能な生活・社会の実現への重要な鍵であると考えている。生物多様性保全、自然の生態系との共生を重視した実践研究にも取組んでおり、これら研究、実践活動を通じて今後とも有益な発信を行なってゆきたい。

CEL